

---

# 剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成されてる

五十嵐 ゆう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成されてる

### 【Nコード】

N1883Z

### 【作者名】

五十嵐 ゆう

### 【あらすじ】

少年はある日、白い空間に居た。そこで出会った我侷な神様。神様のひまつぶしに剣と魔法のファンタジーの世界にGOする事に武器は神様のくれた一方さんの能力のみ

## 序章（前書き）

禁書を知らない人は、ベクトルについての説明を見てください

ベクトル：向きを持つ力の大きさ、

逆に向きのない、大きさだけの物はスカラーと呼ぶ

向きがある力は何でもベクトルです、運動量、熱の運動、電気の流れ、速度、加速度

以上、ベクトル講座

## 序章

少年は気が付いたら見知らぬ白い場所に居た

「……………あ？」

驚愕の余り、威嚇の様な声が出た。決して何かを威嚇してる訳ではない

「何ここ？どこここ？どういう事？」

その言葉を言ったあと、はい、と少年は続けて

「『ここ』って何回言った？」と言った

虚しくなり、出口が何かを探そうとした直後

「六回じゃな？」

後ろからそんな声が聞こえてきた

自分以外に人は見当たらなかった筈だが、と振り向くと  
白い入院着の様な物を着た老人が居た

ちよつと警戒しつつも、この人に聞く以外選択肢はないので

「ここは何処ですか？」  
と尋ねる

「ふむ、さっきの回答が正答か否か聞いてないが……………まあ、どうでもいい

ここは……………まあ、次元の狭間とでも言っておこう」

その言い方が引っかけかり、少年はまた質問する

「次元の狭間とでも、という事は本当はなんですか？」

「べつに間違ってる訳ではない、ただ正確に説明する事は無理なんじゃ

日本語の語彙に無いからの」

日本語の語彙に無い、どういう事がピンと来ないだろうが  
例えば、日本語の「勿体ない」という言葉は外国語には存在しない  
外国には「勿体ない」という概念がないからである

「そうですか……それで、私は何故此処に居るんですか？」  
少年はまた質問する

「わしが呼んだからじゃな」  
老人は即答する

「何故呼んだのですか？」  
また質問をする

老人は、少し考えて、言った  
「……………なんとなく？」

「……………」  
少年は少し沈黙したあと、老人に急接近して  
腹パンチする

「おらぁっ！」

しかし、普通に防御される

「いきなり何をやる？一応、己の生に飽きと諦観を覚えた者を選んだつもりだが……」

老人は歌うように主張する

少年は老人を睨みつけながら怒鳴る

「勝手に人の人生を勘定してんじゃねえぞコラ！その通りでは有るけどな！！」

「と、言うわけで、お主には異世界に行ってもらおう」  
老人は、サラっと言う

「なんでだよ！！！！」

少年は絶叫する

「暇だからじゃ」

老人は例によって即答する

少年が何かを言う前に老人が、じゃが、と続ける

「願い事を3つ、殆どなんでも叶えてやる。

例外はあるが、ほぼ全ての願いを叶えてやれる」

少年は、少し考える

そして

「じゃあ死ね」

「無理じゃ、わしに死の概念はない。頑張ればいけるが、恐らく即座に復活するぞ？」

少年は本気で舌打ちして

「じゃあチート能力でも願おうかな、アクセラレータ一方通行くらいしか思い浮かばない

……それでいいや」

「粒子加速器？いや、禁書の方か？」

「禁書の方です」

少年は即答する

「ベクトル変換と天使化、AIM拡散力場とかないが、黒翼もか？」  
老人はやけに詳しく聞いてくる

お前も禁書厨か？とか思いつつ、少年は答える

「黒翼は……一応付けてください、あと演算能力も」

老人はどこから取り出したか、魔法少女モノのステッキ（明らかにプラスチック）を  
振りながら

「チンカラホイ！今の動作に意味はない。で、二つ目の願いは？」

少年は口を抑えながら言う

「おえっ、吐き気がする。ビニール袋くれ」

「それが二つ目か？ほれ」

老人が手を開くと、ビニール袋が出てくる

「……………」

「三つ目は？」

少年はうーん、と考えて

「願い事を無限に増やせ」

「じゃあ今ここで無限に願いを言い続ける」

「……………」

老人はドヤ顔を浮かべる

「……………」

「無限の中の一つ目だ、これで願いは終わりにして」

老人は明らかに落胆し、そしてニヤリと笑って言った

「人間って面白」

とりあえず無視して言う

「質問いいか？」

老人は答える

「どうぞ？」

「帰って来れるか？」

「帰ってこようと思えば帰って来れる、だが帰ってこようと思わな  
い奴を選んだつもりじゃ」

少年は、少し落ち込んだ

「それは事実だが……。まあいい、次の質問、お前は何だ？」



「わし？お前はどの予想する？」

「……………神？」

「じゃあわしは神じゃ、お前がそう思うのならそれが正解じゃ」

少年は、少し黙り込んだ、そして

「……………本当は？」

「別に神という解釈も間違いじゃあない、お前が神と思うなら神だし、仏だと思っなら仏じゃ」

「じゃあお前は屑野郎だ」

「そうか」

老人は少し笑った

「取り敢えず、お前には十二歳の女の子になって、剣と魔法のファンタジーの世界へ行ってもらおう」

「なんで！！？」

「なんとなくじゃ！！」

少年は思いっきり地面を踏みつける、そのベクトルを変換し老人にぶつける

しかし、老人は全く動じない

「言語中枢を書き換えて、向こうの言葉を分かるようにした。」

という訳で』— F p v g M M s p H r a Z E Y Z V r X y g 《眠

れ、少年」

老人は、恐らく天上の言語とかそんな感じの言葉で短い言葉を紡ぐ  
勿論、少年には意味は理解出来ない

少年は意識が薄れていく

序章（後書き）

続く

衝撃力（前書き）

F  
||  
m  
a

## 衝撃力

「おい！大丈夫か！？」

少年に向かって、聞いたことがない言語で声がする  
しかし、意味は認識出来た

「……………はっ！」

少年は、思いつきり起き上がった

「……………ここは？」

その時、少年は異常に気付いた。声が物凄い高いのだ、心当たりはある

『今からお前には十二歳の女の子になって剣と魔法のファンタジーの世界に行ってもらおう！』

(……………あの糞ジジイ……………！)

少年は、いつか殺す、と考えた所で思考を一旦止める。

そして自分に話しかけてきた人と、その周囲に意識を向ける

話しかけて来た人は、長身の男性、髪色は青……………

生物学的に有り得るのか？染めてるのか？

年は二十三から二十五、三十代ではないだろう

顔はイケメンだった、滅べ

周りの風景は、殆ど石造建築の建物、下は地面と草

一六世紀の西洋みたいな感じだった、世紀は適当に言った

少し違和感を感じて自分の格好を見てみた

全裸でした

「……………は？」

ここまで〇・五秒

一方通行並みの演算能力を望んでおいたからであろう  
めっさ頭の回転が早いぜ、ひゃっはー

「おい、大丈夫なのかおま

「きゃあっ！」

少年は、そんな感じの素頓狂な叫び声を上げてしまった  
死にたい、少年はそう思った

石で出来た家

「いや、本当すいません」

少年は、何故か知ってる言語で謝罪した  
恐らく、あの自称神様の老人の粹なはからいだろう

謝罪の理由は、叫んだ後、この青年が警察に連行されそうになって慌てて弁明した訳です、後は分かるだろう

「別にもう怒ってないからいいんだけどさ……」

青年はカップを片手にそう言う

青年は、それじゃあ、と続けて

「君、名前は？ それとどういう事情であんな事になってたのか」

少年は、少し考える

(別に本名を名乗る義理も意味も無いしな……)

「名前は、火野神作です。事情は……」

少し黙り込む。その理由は簡単だ、ただ状況を整理しているだけである

「ヒノジンサクね。どうした？ 言いにくい事情でもあるのか？」

青年はそう尋ねる

「……意識が無かったから、覚えてないのですけど……」

多分、寝てる間に全裸で放り出されたのだと……」

恐らく自称神様、略して じしよかみっ！ がやったのであろう  
あいつならやりそうだ、と少年は考える

「……酷いな」

青年は思わず言葉を零す

少年も、それには大いに同意だ、と思う、口には出さないが

少年は話題を終わらせようと

「ところで、貴方の名前は何？」

青年は答える

「ん？名前ね、ミハイル」

「ふうん、じゃあミーシャって呼ぶね、いいよね？答えは聞いてない」

少年は無邪気な笑みを浮かべながら言った

ミーシャは少し詰まりながら言った

「あ、ああ、いいけど……」

ところで、とミーシャが言う

「君、今晚どこで寝る？」

「さあ？最悪路上でなんとかなる、といいな」

反射をすれば、大抵の危険から身を守れる、と少年は思う

ミーシャは相当驚愕してから、数秒で落ち着かせて

「いやいや、危ないよ」

「しかし、金もないからな……」

「じゃあ、うちに泊まってく？」



少年は、ふむ、と考える

「いいの？」

「いいよ、部屋は無駄に有るし」

ふふ、と少年は笑って

「じゃあお言葉に甘えて」

ミーシャはプイ、と顔を背けて

「……それじゃあ、その部屋使って」

少年は、頭に疑問符を浮かべながら言う

「……？なんか怒らせた？」

ミーシャは慌てて否定する

「ああ、すまん、怒ってるわけじゃあない」

「……？まあいいや」

少年は、ふざけた口調で続けて

「ちなみに言うておくけど、寝込みを襲うのはNGなんだからって

「誰がするか、そんな事！！」

衝撃力（後書き）

続く

運動量(前書き)

$$m \frac{d^2 r}{dt^2} = F$$

## 運動量

「おい起きろー」

ミーシャは、少年を起こそうとしている少年の体を揺さぶろうと、触れた瞬間

バチィと手が弾かれた

これは、恐らく無意識の反射による物だが、ミーシャはそんな事知ったことではない

「魔法……？……お前起きてるだろ？」

沈黙が十秒程経った後、そろそろミーシャも痺れを切らした様で思いつき少年を蹴った

見た目十二の少女を蹴るのはどうかと思う

すると足が折れた

「ぎゃあああああああああー！」

「むう………うるさい………」

「あれは無意識にやってるからね、というか本気で蹴ってくるのか  
思いもしないし」

「無意識だったのか……」

「私の能力は、皮膚に触れた凡ゆる力あらを正反対に変える能力」

本質とはかけ離れているけど、それを態々（わざわざ）説明する義理はない

「結構すごいな」

「リチウミル先生」

突然十一歳くらいの男の子が入ってきた

「誰この人？」

幼児は少年を指さしながら言った

そして、少年は冷めた目で見つつ

「人を指さすな」

とだけ言った

ちなみに、少年は『指さすな』とかそんな怖い表現では無く『人を指さしちや駄目だよ』みたいな表現をしたかったのだが、

ここの言語を文字通り頭に叩き込まれて早1日、生憎そんな語彙を持ち合わせてる筈もなく

「う、ごめんなさい……」

幼児は本気で恐怖してる様だった

そしてミーシャが

「そんなに指さされるの嫌だったのか？」

(……………そんなに怖かったか俺?)

少年はちょっとへこんだ

「この子はへリナ、俺の教え子」

「先生をやってるの?」

「塾の先生を暇つぶしに」

暇つぶし、て……、少年はそう思ったが言わない  
塾の先生に免許はいらなかった筈だから

「こいつはヒノジンサク、全裸で放り出されてた可哀想な子だ」

「火野って呼んでね」

少年は間髪入れずに言った、別にどうでも良かったが、取り敢えず  
言っておいた

「よろ

へリナがなんか言った気がするが、それを置き去りに少年は言う  
「タイミング逃したんだけど、リチウミルって貴方の苗字?」

「ああ」

「……………」

へリナが はなしにいれてほしそうに こっちをみてる

「…………ヘリナ君…………だっけ？よろしく」

少年は誤魔化す意味合いを込めてニコツと笑った

ヘリナは笑顔で言った

「よろしく、ヒノ」

少年は欠伸をしながら言う

「それじゃあ自己紹介も済んだ所で、私は寝る」

ミーシャは呆れながら言った

「お前起きたばっかだよな？」

「チツ…………うつせーな、反省してまーす」

「……………腹立つなお前」

「すまんね、……………よし！ここから出ていった後、どうしようか

……………」

ヘリナは無視して言う

「……………先生」

ミーシャも少年を無視して答える

「おう、なんだ？」

少年は無視された事を不服に思いながら、言った

「……………スラム街に行って襲ってきた奴から逆に金品を強奪すればいいかな……………」

ミーシャは諦観を覚えつつ言う

「……はあ……いいよ、ウチに泊まっただけ」

少年は社交辞令の笑みを浮かべながら

「ありがとう、でも明日出てくね。金を手に入れる方法なら見つけたから」

「それをやって欲しくないから言っただよ!!」

少年は無視をやり返しながらへりすに尋ねる

「先生に何か聞くこと？言うことがあったんだよね？」



**運動量（後書き）**

面倒臭いので次回に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1883z/>

---

剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成され

2011年12月9日23時54分発行